

死後の世界…なう

人生灰色

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

面白いことが好きな人間が死後の世界で楽しく生きようとする
そんな話

目次

第1話	1
第2話	4
3話	8

第1話

目が覚めると知らない天井…なんてことはなく、青い空が広がっていた。

まだ寝ぼけている頭を押さえつつも、取り敢えず体を起こし、まわりを見渡してみる。

校舎らしき建物に、制服を着ている少年少女。どう見ても学校ですね、分かります。

「てゆうかここどこ？」

そう呟きつつ、ズボンについた埃を払いながら立ちあがる。

まわりをもう一度見渡してみるが、うん、やっぱり知らない学校だわ。その時、徐々にハッキリしてきた頭で、

俺は衝撃の事実気付いた。

「俺、お腹ペーペーだ」

嘘です。本当は自分が事故死したことに気付いたんだけどね。でもそうになると、今ここに俺が生きてるのはどういうこと？

ハッ　まさか死後の世界とかそういう話か。

これは急いでTwitterにupしなければ。

そこで俺は自分がスマホを所持していないことに気付いた。

……俺今ので何回気付いたって言ったんだろう。

「まあそんなことはどうでも良いんだよ」

取り敢えず職員室にいくか。場所が分からんが誰かに聞けばいいけるっしょ。

取り敢えず最初に会った三人組に話し掛ける。

「へい、そこの君たちちよつといいかい？」

「はっ？」

そのうちの一人、青い髪の青年が返事した。

良かった、無視されたらどうしようかと思った。

てゆうかこいつらだけ制服がブレザーだな、なんで？

「悪いんだけど職員室の場所教えてくんない？」

「職員室ですか？ええくと、大山どこだったっけ？」

「ええ!?!僕に聞かれても困るよ、日向くん!?!」

なんだ、こいつら自分の学校なのに知らないのか？

「ねえあなた、もしかして死んだ記憶あるんじゃない?」

そんなやりとりを聞いていると一緒にいた女が急に話し掛けてきた。

「ふっ死んだ記憶があるかとは、少々答えに困る質問だが結論から言おう、ある。」

「「ええー!?!」」

「やっぱりね」

なんかすげー納得した顔されてるんだけども、あと後ろの二人うるさい

「ところでそれ聞くてことは、君たちも死んだ記憶があるってことでいいんだよね?」

「ええそうよ、そしてあなた、我が死んだ世界戦線に入りなさい」

「唐突に話が飛んだとか色々言いたいことはあるがいいだろう。よく分からんが入ります」

「今の話の速さに対応した!?!」

青い髪の青年からツツコミが入る。というかそろそろ名前を教えてください欲しい。

「今ツツコミ入れたのが日向くん、馬鹿よ。」

「紹介酷くね!?!」

この女は心でも読めるのか。取り敢えず日向くんはツツコミ担当と。

「もう一人は大山くん、特徴がないのが特徴よ」

「どうも大山です、よろしくね」

「よろしく」

「そして私がリーダーのゆりよ。みんなにはゆりっぺって呼ばれてるわ。」

「おーけーだぜゆりっぺ」

「対応がはやすぎるわね。ところであなたの名前は?」

おっと肝心の俺が名乗っていなかったとは、失敬失敬。

「俺の名前はダークフレイムマス……ごめんなさい。真面目にするんで帰らないでください。」

見たか諸君、これがDO☆GE☆ZAだ

生前何百回と土下座をこなしてきた俺からすれば、たった一回の土下座など恐るるに足らん！

取り敢えず三人が足をとめてくれたんで良かったです。

「初めまして。神崎 秋です。気軽にシューくんと呼んでください」

「宜しくね神崎くん。」

見事にスルーされました。

「他の仲間も紹介したいから、取り敢えず校長室に……って神崎くん!?!」
ゆりっぺが声を上げた時にはもう遅く、俺は地面に体ごと倒れこんでいた。

「おい神崎!しっかりしろ!」

「神崎くん!」

他の二人も心配してくれてるようだけど、違うんだこれは

ぐぎゆるるー

「……取り敢えず食堂に行きましょう」

……ごめんなさい

第2話

「まさか…、ここが楽園だったとでも言うのか。」

「ただの食堂だろ？何言ってるんだ？」

幸せを味わう俺に対して、日向から冷たいツツコミが入る。

ふっこの味が分からぬとは。お主もまだまだよのお

「馬鹿なこと言ってるんで、食べ終わったなら行こうぜ」

「あいよ〜」

そう現在俺たちがたむろっているのは食堂。

あの後空腹で動けない俺を日向と大山がわざわざ運んでくれたのだ。

ゆりっぺ？ 先に校長室に行っちゃいましたがなにか？

全く、身動きがとれない仲間を置いていくなんて、なんて薄情な女なんだあいつは。

「まあそう言うなって。ああ見えてもあいつはいいところもあるんだぜ？」

「ああ見えて？」

あ 日向が黙り込んだ どうやら余りつつこむべきポイントではなかったらしい

「ま、まあとにかく飯食ったなら早く校長室に行こうぜ。」

無理矢理話かえたな。まあ、行くのはいいんだがその前にと…

「うん？神崎くんどこ行くの？」

そんなの決まってるだろ。男の戦場と言えただ一つ。

「トイレだよ」

ものすごくどうでもいい戦場だった。

「ふう、スッキリしたー」

危なかった、あのままいたら俺のマグナムがビッグバンを起こすところだった。

手を洗い終わりトイレから出る。

するとまあ、なんとということでしょう。

視線の先をいかにもな百合カップルが歩いているではありませんか。

これは話し掛けるしかない。

「どうもあなたの背後に這い寄る変態。神崎 秋です。」

「ぎゃあああー!!」

女の子らしからぬ悲鳴に俺がびっくりしてしまった。

此奴なかなかやりおるわ。

「い、いきなり誰?」

「這い寄る変態神崎です」

「それはもういいから!」

ああ、そっちが誰って聞くから答えたのに。

「し、しおりん。こういう時どうすればいいんだろう!」

「あたしに聞かれてもわかんないよ、みゆきち!」

「取り敢えず道に迷っちゃったんで、校長室どこか教えてくんない?」

そう、俺はトイレを探して猛ダッシュを繰り返しているうちに、道に迷ってしまったのだった。この学校が広すぎるのが悪いんだからね!

「校長室?もしかして新入りの方なんですか?」

「そう聞くんことは君達も戦線のメンバーなのかい?」

「そのとおり。あたし達は日々天使と戦い続ける死んだ世界戦線の一員なんだよ!」

あーら、また新しい単語が聞こえてきたぞ。まあいつか。

「とりま案内よろ」

「まかされよう」

そこから三人でとりとめのない会話をしながら校長室へ向かう。

二人のパンツの色の話とかパンツの話とかパンツの話とか。

冗談。ただ一回マジで振ったらしおりんから蹴りが飛んできました。た。

あれはいい蹴りだったぜえ。

そうこう言ううちに校長室到着。迷わずドアノブを捻る。突然ハンマーが奇襲。俺、ブリッジで回避。ふう危ない危ない。

「これなに?」

「えっと、一応対天使用のトラップなんだけど…、初見で避ける人初めて見たよ」

「反射神経は自信あるからね」

俺の数少ないまともな長所の一つだけ。……自分で言ってる悲しくなる。

んじや改めまして

「ノックしてもしもーし」

中に入るとゆりっぺがなんか偉そうな座り方してた。パンツ見えるぞ。

「遅いわよ、神崎くん。」

みなさん聞きました?倒れた人を置いて行きながらのこの発言。

無言のグーパン。解せぬ。

「取り敢えず戦線のメンバーを紹介していくわね。」

紹介は長いんで以下略。全員個人的なただらけでした。あと余すことなく全員アホだったとだけ付け加えておこう。

「そういえば神崎くんは何か出来ることとかある?特技とか」

「生前は色んな部活にスケットしてました。個人的には音楽に興味あります。」

「ということは身体能力には問題無さそうね。それと音楽が好きなあなたをガルデモのマネージャーに任命してあげるわ。」

がるでも?なんかカルガモみたいな発音だね。

「ガルデモっていうのは我が戦線の陽動班のことよ。作戦を行うときは主にライブをしてもらってNPCの注意を引いてもらうの。ああ、NPCっていうのは人間とはちがう元々この世界にいる人たちのことね。」

「分かりやすい説明どうも。それで?陽動班っていうのはどこに行けば会えるんだい?」

「だいたい放課後は音楽室で練習してるわ。ちなみにあなたを連れ

てきた二人もガルデモのメンバーよ。」

なんと既にコンタクト済みだったとは。しかししおりんはまだ分かるが、みゆきちがバンドのイメージがわからない。うくん、タンバリンかな？

そこで俺は唐突にとても重要なことを思い出した。

「日向たち放置してるの忘れてた」

3話

現在俺は入江と関根の二人に普段練習をしているらしい空き教室へ案内してもらっていた。

言うまでもなくガルデモのメンバーに挨拶しておくためだ。

ちなみに日向と大山にはちゃんとさつき謝ってきた。

俺が真面目に謝ったのが意外だったのか二人とも笑顔で許してくれました。二人の優しさに感謝感激飴あられだね。

……俺何言ってるんだろ。

「どったの秋くん。浮かない顔して」

「いやあー、ちよつと自分の頭のおかしさを再認識しただけなんで、気にしないで下さい。」

「本当にどうしたの!？」

どうでもいいけどしおりんって、結構オーバーリアクションだね。

まあ、わざとやってんだらうけど。

「しかしガルデモの残るメンバーか…、一体どんな人達なんだろう」

「あつ、やつぱりそこ気になっちゃうー?けど残念。それは会ってからのお楽しみです。」

うーん怖い人達じゃ無ければ良いんだけど。ただまあ、この2人を見てたらなんか大丈夫っぽい感じするよね。なんと言うか雰囲気的に。

「な、なんですか?」

おつと顔をじっくり見ていたから不審に思われちゃったみたい。

「いやー、この学校の人ってみんな可愛い子ばかりだと…うん?」話を途中で止めたのはギターの音が聞こえたからだ。

どうやら目的地に着いたらしい。ギターの音に懐かしさを感じながらも教室のドアをガラリと開けた。

中に入ると燃えるような紅い髪をした美人さん、しかもかっこいい系の女の子が確認するようにギターの音を鳴らしていた。どうやらチューニングをしていたところだったらしい。

彼女はこちらに気づくと

「…アンタ誰？」

と、少し雑な質問をして来た。

「初めまして、今日から戦線に加わることになった神崎秋と言います。ゆりっぺさんからこちらのバンドのマネージャーを担当するように指示されご挨拶に伺いました。」

「ふーんマネージャーね。まあ音楽により集中出来るようになるならいいけど。取り敢えずその嘘くさい態度は辞めたほうがいいと思うよ。」

あらら、どうやら一発でバレちゃってたみたい。結構勘が鋭いなね。

「これは失礼。軽いジョークのつもりだったんだけどな。」

「アンタのそれすごい分かりやすいし。取り敢えず宜しく、

あたしは岩沢、ガルデモのボーカルをやってる」

言葉を交わしながらも軽く握手をする。どうやら思ったよりも彼女は気さくな人らしい。

「あとはもう1人ギターのひさ子がいるんだけど今日はまだ来てないな」

「ギターのひさ子さんね、今度会ったら挨拶しとくし、取り敢えず今日のところはこの辺でおいとますることにするよ。」

それじゃあまた、と3人に挨拶しながら教室を出る。

取り敢えずひさ子さんとやらを探しながら戦線のみんなと絡んでみようかな。俺はわくわくする気持ちを抑えながらも少しずつ足を早めて行った。